

牲川からのコメント

広島県内で周遊型観光を確立させるための施策—尾道観光プランの提案—

石川 幸

幸さんは、もともと旅行好きということでその魅力について考えてきました。ただ、その魅力をどのように伝えるべきかに悩み、卒論のテーマ決定には苦勞していたように思います。最終的に、自分の出身や年齢層、将来の仕事から、広島県尾道市を楽しむための旅のプランを提案することに決めました。平和記念公園と宮島以外の地域を観光してもらうにはどうしたらよいかということで、自らも訪問したことのある尾道市を対象に文献・インタビュー調査を行い、同世代に向けた旅行プランを設計しました。尾道市は古くからの漁師町で、海と街並みを生かした再開発が進められています。幸さんの論文から、尾道氏が、食や景観など、旅の楽しみといえばこれという代表的な要素を確実に備えた場所であることがわかります。それに加え、インタビューからは、広島カープの試合観戦など、特定の趣味のために旅する人々の存在も浮かび上がりました。幸さんには今後も、他者との対話から、自分とは違う価値観や希望を発見して行ってほしいと思います。

日常におけるストレス対策—韓国の 20 代女性を対象としたメンタルヘルス分析—

林 修我

コロナ禍にあって、林さんは大学生活のかなり長い時間を、出身地の韓国で過ごすことになりました。私が担当した日本語のクラスもオンラインで実施した期間が長く、韓国の自室から授業を受けていた林さんの姿が記憶に残っています。林さんの卒論によれば、そうした生活に入る前の高校時代から、ストレスのコントロールに難しさを感じていたとのことであり、コロナ禍の生活にも大変な苦勞があったことがうかがわれます。卒論では、ストレスをうまくコントロールしている A さん、うつ病をわずらったが克服した B さん、多忙で強いストレスがかかっている C さんと、異なるタイプの、韓国出身の 20 代女性にインタビューし、それぞれのストレス克服方法の違いを描き出しました。そのうえで、この三人は、「セルフ・エフィカシー」（自己効力感）を得ているという点で共通しているということも見つけました。三人の生活と顔が見えるインタビュー結果となっており、運動と SNS という一見当たり前の克服方法が、親近感と真実味をもって伝えられています。

## 名探偵コナンから見る復讐殺人の殺害動機が生まれる背景及び殺害方法と殺害動機 の関係性

川口 侑花

侑花さんは、人はなぜ人を殺すのかという関心と、『名探偵コナン』の長年のファンだということが重なり、卒論では『名探偵コナン』の殺人動機をテーマとすることに決めました。夏季休業中に作った、105巻までの全殺人事件に関するリストは圧巻でした。作業は相当に大変だったろうと推測しますが、侑花さん自身はその作業自体を楽しんだ様子でした。ただ、膨大なデータが集まったからこそ、そこから何を見出すのかに迷いが出てきます。侑花さんが考えたかったことは、殺人を犯す人間の心理・動機であり、最終的には、『名探偵コナン』の中で殺害動機としてもっとも多く、犯人の強い心の動きが予想される「復讐」に絞り、一つの作品を細かく分析することになりました。犯人の心理と殺害方法とを丁寧に結び付けた分析は説得力がありました。他方で、人の復讐心理を知るという目的に対し、『名探偵コナン』が最適な対象だったのか。作品の魅力自体から、改めてテーマを考えてみるのもおすすめです。

## 英語学習とマインド

北内 僚

僚さんの研究動機は、英語を楽しく話せるようになりたいということでした。受験英語は不得意ではなかったものの、英語を話すことに抵抗感があったということで、進級論文では外国語専門の大学に通う友人 I に英語学習の方法をインタビューしました。その過程で、日本人同士で英語を学ぶ際には発音の質を落とすというトピックが出てきて、英語使用に対する日本人のマインドに問題があるのではと考えるようになり、卒論のテーマとしました。英語に関心がなさそうな K、留学もした I、英語は話せないと思われる S の 3 人にインタビューし、初めてインタビューした K と S からは予想外の答えを、I からは留学経験から得た実際の授業運営のヒントを得ました。相手の経験や考えに沿って問いを重ねていく僚さんのインタビュースタイルが、自分の仮説とは異なる結果の引き出しにつながりました。英語習得の度合いは個別の環境や動機に左右されるという結果を踏まえ、今後の英語学習を考えていってほしいと思います。

## 20代における多様な人生選択の在り方

近藤 柚葉

柚葉さんは、進級論文ではInstagramでの自己表現方法、卒論ではテーマに迷い、最終的に20代の人生選択テーマにしました。2年間でテーマを変えてきましたが、他者に見せる自分と自分らしい自分とのずれという問題がそこには通底していたように思います。就活でそのずれに違和感をもった柚葉さんは、専門学校や大学を卒業すれば就職するというルートが非常に一般的な中で、別の選択は可能なのか、就職を選択するにしてもどのように決定に至るのかをインタビュー調査から考えました。国際公務員を志望し在学中も多様な活動を行ったAさんと、専門学校を中退しフリーターを経て趣味を生かした職に就いたBさんという、二人の魅力的なインタビュー対象、さらにその二人と自身との比較を通じ、それぞれの人生の選択の軌跡と要因を明らかにしました。価値観や能力、経験などを反映させながら、出会いやチャンスはどう生かして少しずつ人生を形作っていくのか。柚葉さんの未来が楽しみです。

## 読書にしかない魅力とは—読書嫌いでも読書がしたくなる魅力を探る—

塩野 莉彩

莉彩さんの2年間のテーマは、いつもどこかで仕事とつながっていたように思います。進級論文では、この30年間の働き方の変化を、家族へのインタビュー調査から確認し、卒論では就活で読書経験について問われたことをきっかけに、読書の意義について考えました。読む本の冊数や時間は着実に減少してきましたが、読書=善という図式は残っています。莉彩さんは自分が中学生以降あまり読書をしなくなったということがあり、そのよさはどこにあるのかを知りたかったようでした。しかし新聞紙上での議論を見ると意見は割れており、読書好きの友人へのインタビューでも読書のデメリットこそあまりなかったものの、必ず読書すべきと断定できるほどの意義は見出せませんでした。読書を、本に限らず文字を読むことまで広げれば、多くの人々が多様な媒体で読んでいることでしょう。映像からも得るものはたくさんあります。それでもなぜ本を読み書くのか。研究者である私にも問いかけてくる論文です。

## 高校生のボランティア留学の意義

田中 愛花

愛花さんは当初は、シャチのコミュニケーション能力と魅力に関心があるということで、私の専門から大きく離れた関心にやや戸惑いがありました。私のゼミではそこに関心をもつ自分にもどって、問題意識を明確化するプロセスを重視しています。そうしたプロセスがきっかけになってか、卒論では高校時代に経験したボランティア留学へと、愛花さんはテーマを変えました。いったんテーマを決めると、愛花さんは予備調査としてのグループ・インタビュー、3人の個別インタビューを順調に進めていきました。その間に、ボランティア留学のみがその後の将来等に強い影響を与えるのではなく、その前段階からそうした活動への参加を促す環境や個人の意志があること、一方でその意志が、留学を通してはっきりとした形となり進路選択につながることに、特別だと思っていた、活発な学生生活を送る友人と自身とに共通点もあることなどに気が付きました。キャリア選択を後押ししてくれるものとして、高校時代の留学の意義を説得的に浮かび上がらせた卒論です。

## Xを炎上しないように利用するにはどうしたらよいか

時任 由樹

由樹さんは中学生のころからオンラインでの交流を始めており、大学では文芸サークルに入るなど、不特定多数に向けた発信に抵抗感がないように思われました。そこで進級論文では、SNSで発信することの意味について、インタビューを通し確認しました。けれども同時に、オンライン上でのプライバシーの流出や「炎上」といった問題も多く目にしてきたため、発信しあうことへの恐れも感じていたようです。そのことが、SNSの「X」で実際に起こった炎上事例を多数収集・分類し、その要因と防止方法を提案するという卒論につながりました。由樹さんの提案は、センシティブな話題やある属性の者への見解を示す話題を避けるというものであり、そうした話題に対する多様な見方を知るために身近な人々と意見を交わしていくことの重要性も主張しました。では、由樹さん自身にとって、もっとも心地よいオンライン空間とはどのようなものなのでしょう。そこに立ち戻って考えてみることも大切なように思います。

## 大学生の不登校について

西田 幸歩

幸歩さんは、大学生の不登校の要因と解決策について、既存の調査結果と家族へのインタビューを用いて論じました。幸歩さんが大学に入学したのは2021年のことであり、多くの授業がまだオンラインで実施されていました。それが22年になると原則すべての授業が対面となり、幸歩さんは授業形態の大きな変化から、心身に不調をきたし通学が難しくなったとのことでした。インタビュー対象となった家族の場合は、描いていた大学像と実際のずれが要因となり、しばらくの間、通学しなかったそうです。幸歩さんも指摘するように、高等教育機関は、進学も通学も学生の意志次第であり、不登校は問題として認識されにくいのです。その解決を、幸歩さんはカウンセリングの存在を示すなどして、学生個人の意欲を高めることに求めました。しかし卒論では、授業形態や大学改革についても言及されています。個人の意欲ではいかんともしがたい要因があるとするれば、それも問題化する必要があるように思います。

## 日本語学校の教育の質を高めるには—九州にある日本語学校を事例に—

范 冬暁

冬暁さんは、日本語学校に通っていた自らの経験から、学校は留学生の要望を容れ、教育の質を改善すべきという見解をもっていました。その明確な見解から、2か年にわたり九州のある日本語学校でフィールド調査とインタビュー調査を行いました。留学生の立場からは、学校と教師の方針、技量に問題があるために教育の質が低下していると思え、冬暁さんも調査前はそうした認識でした。調査を始めてみると、冬暁さんが日本語学校に通っていたころとは、学生の出身や年齢、学ぶ目的も大きく変わっていることが判明しました。また日本語教師のインタビュー調査や授業見学から、教師は熱意をもって授業を実施しているが待遇が低く、登録日本語教員という新資格ができたことで教師への負担が増していることなどにも気が付きました。研究が進めば進むほど、教育の質を改善することの難しさが浮かび上がりました。冬暁さんが最後に示した改善策は、学校も教師も実現したいけれど難しい、それが日本語学校の現状かもしれません。

個人中華料理店での食べ残しを防ぐためには

福崎 汐音

汐音さんは、高校卒業前からアルバイトしてきた中華料理店を取り上げました。店長夫妻と家族のような関係を築いており、店長が作った料理が残されることを残念に思ったことが研究の動機でした。ところが実際にフィールドワークを行ってみると意外にも食べ残しは少ないことがわかり、汐音さんは一時研究の方向性に迷っていたようでした。しかし、食べ残しが少ないということこそが、このフィールド調査による発見です。そこで汐音さんは、なぜこの店では食べ残しが少ないのかに着目を変え、常連客の好みに応じた店長の配慮など、小規模店ならではの要因を突き止めました。調査結果の記録リスト(末尾)から、この研究成果が丹念な観察によって導き出されたことがわかります。またこのリストを眺めていると、人々がやってきて食事を楽しんで去っていく、中華料理店の日々が不思議と浮かび上がってきます。地域コミュニティとつながりをもってきた、汐音さんにしか書けない論文です。

京都におけるオーバーツーリズムの解消に向けた朝観光の可能性

—京都の住民と観光客の視点から—

水田 紗也花

紗也花さんは、京都市内に住みアルバイトもしていることから、観光客の急増と、交通機関の混雑を目の当たりにし難渋している当事者です。そこで紗也花さんは、京都のオーバーツーリズムの解消を研究しました。進級論文では、頻繁に京都観光に来る友人にインタビューし、混雑の実態や京都の魅力を確認しました。卒論では、このインタビューと自治体等による調査のほか、清水寺の参道で行ったフィールド調査の結果も用い、時間帯による混雑の違いを把握しました。観光地では昼過ぎが特に混雑していることがわかったため、紗也花さんは、観光地は朝早い時間に訪れ、午後は少し閑散としている地域の、仏閣を活かした店舗を楽しむという新たなルートを提案しました。大手飲食産業がこうした場所にカフェを開いているということは、今後はこうした地域に人気に移っていくのかもしれませんが。紗也花さんにとっても、日常を過ごしている京都市の非日常と未来が垣間見えた研究となったように思います。

## ワーキング・ホリデー制度の意義

—台湾からの制度利用者へのインタビュー調査より—

山根 日奈子

日奈子さんは本ゼミ所属の前から、韓国に関心をもっていました。その関心は海外出身者へと広がり、進級論文では、総合政策学部のある三田市が留学生にとって魅力的になるためにはというテーマで調査しました。日奈子さんはその後、卒論のテーマに迷いましたが、身近な存在に目を向け、アルバイト先で出会った、ワーキング・ホリデーで日本に滞在している台湾出身者を調査することに決めました。日奈子さんによれば、国内のワーキング・ホリデー制度の利用者はまだほとんど研究されていないそうです。二人の台湾出身者を対象としたインタビュー調査から、ワーキング・ホリデー制度を利用した動機、日本滞在中の移動や仕事の経験、キャリア設計等をまとめた本研究は非常に貴重です。日本の観光産業を、半ば自らも観光客のこうした人々が支えていることを、私も含め多くの日本在住者は知りません。日奈子さんにはこれからも、マイノリティの存在を、他者に身近なものとして伝えていくことを期待しています。

## 高等学校における第二外国語教育の必要性

山本 仁菜

仁菜さんは、高校時、K-pop とかかわりを深めたことをきっかけに、韓国語を学び始めました。韓国語が使えることは、進路選択や、その準備ともいえる海外でのインターンシップ機会の獲得につながったということです。英語で十分という認識が広がる中、仁菜さんは、自らの経験や先行研究を用いて、大学より以前に、英語以外の外国語を学ぶことの意義を主張しました。また先進事例として、台湾と韓国の高校での第2外国語教育の実施状況もまとめ、台湾と韓国では多くの語種が高校で教えられており、大学入試の科目ともなっている一方で、教員の数の問題などにより一つの高校で実際に教えられている第2外国語の種類はごく少なく、受験との関係もあり特に日本語への偏りがあることがわかりました。台湾・韓国が第2外国語教育を推進してきた歴史的経緯の詳細、自身以外の第二外国語使用者の経験談などがあると、さらに論文の説得力が増したようには思います。韓国語とともに、仁菜さんの今後がどのように展開していくのか、楽しみにしています。